

アドルノの「同一性」批判について
——認識・社会批判と「客観の優位」の観点から——

志田 圭将（一橋大学大学院言語社会研究科修士課程）

本報告の目的は、アドルノによる「同一性」の批判を、認識・社会批判と「客観の優位」の観点から素描することである。

アドルノは、主観主義的な同一性思考に対する批判の中で、客観の優位という考えを示している。主観主義的な同一性思考、特にドイツ観念論の哲学は、主観こそが客観を作り出しているとする。このことは、主観の側から客観を自身に同一化することを意味する。例えば、フィヒテやヘーゲルらは、「物」のような性質を帯びて主観に対立する社会が、実際には主観によって媒介されていることを見抜いた。これによって、主観と、客観としての社会との同一性を示した。しかし、アドルノは、社会は諸主観に還元されえず、主観に対して敵として現れるのであり、主観こそが徹底的に社会に媒介されているのだと反論する。この文脈では、客観の優位とは、客観は主観にとってやはり他なるものであるということ、主観にとって他なるものこそが主観の構成的契機であるということを示すものである。

同一性原理の批判という点で、アドルノにとって認識批判と社会批判は一致する。アドルノは、主観の側から客観を同一化することを批判すると同時に、これと同じ同一性原理によって、人間は社会に従属させられているとも主張する。この従属は、同一性原理の社会的モデルである交換原理によって生じる。交換とは、諸々の対象を同一化し、等置する働きである。この働きが人間にも適応されたとき、人間はその具体性を捨象された抽象的な個へと還元される。つまり、人間は社会における機能としてのみ肯定されることになる。交換原理によって貫かれた社会においては、社会の機能としてのあり方こそが人間の本質として課せられており、そうでないあり方は非本質的なものとみなされることになる。この場合、自己は自己としての内実を既に失った状態にある。社会において自己であるということが意味するのは、自己が、自身の内にある他なるものをいわば存在しないものとみなし、自己自身の同一性を擬制として作り出すことである。だが、実際には、自己は自身の中にその構成的契機として他なるものを含んでいる。こうした他なるものは、例えば肉体的契機、痛みとして、その存在を主張する。アドルノは、「自己」に対して他なるものとして存在する自己に「実存」のような名を与えることは、その実体化であると批判し、それをあくまでも非同一的なものと呼ぶ。この文脈では、客観の優位とは、主観としての「自己」の内に他なるものが内在していること、その構成的契機であることを示すものである。

本報告では、以上の点、つまり主観は外部の世界を他なるものとして経験するということ、その外部の世界こそが主観を形作っているということ、そうして形成された主観の内部において主観は他なるものを経験するということ、これらの連関をより詳細に検討する。